

齋藤茂吉全集

第五卷

齊藤茂吉全集

第五卷

第十一回配本（全三十六卷）

齋藤茂吉全集 第五卷

定價 千八百圓

昭和四十八年十一月十三日發行

著者 齋藤 茂吉

發行者 岩波雄二郎

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

發行所 株式會社 岩波書店

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

一日ばなし	一
左千夫先生のこと	二
長塚節氏を憶ふ	六
書齋	一五
白秋君	一六
思出す事ども	二〇
北村孤月君	四
寓居獨語	五
冬夜漫筆	五
悼大須賀乙字君	七
羽前に歸りて	九

溫泉嶽雜記	七〇
吳秀三先生	七〇
癡人の癡語	七四
返忠	七四
鶏と猫	一〇一
香港娘	一〇六
寸言	一〇八
ドナウ	一一一
玉菜ぐるま	一二三
紙幣鶴	一二六
花を嗅ぐ	一二八
寢衣	一二三
養老院	一二三
ピエテル・ブリューゲル	一二五
接吻	一二〇

蠅子	一四四
森鷗外先生	一四九
念珠集	一九五
1 八十吉	一九五
2 痰	二〇二
3 新道	二〇六
4 仁兵衛。スペクトラ	二一〇
5 漆瘡	二二三
6 初詣	二三〇
7 日露の役	二三三
8 青根温泉	二三四
9 奇蹟。日記鈔	二三六
10 念珠集跋	二三〇
ニイチエの墓を弔ふ記	二三五
第一高等學校思出斷片	二四六

南京蟲	二五八
ドナウ源流行	二六〇
餘言	二九七
湖畔	三〇二
アルゴイ山中	三〇六
マインツの一夜	三二三
ドツエントのこと	三三六
エミール・クレペリン	三三一
チャーエンの言葉	三四三
島本赤彦臨終記	三四七
牡雞の記	三六七
漫筆	三七四
ヴェネチア雜記	三八一
復活祭	三九五
水源地行	四〇一

妻	四〇四
羅馬	四〇七
ブダペスト行	四一〇
蟬聲	四三〇
カフエ・ゲイシャ	四三二
蝶々夫人	四三七
探卵患	四四〇
ゲゾイゼ谿谷	四五〇
鹿の床	四五九
歸路	四六五
正岡子規	四六八
結核症	四七一
雜草記	四七四
月雪花	四七七
島木赤彦君	四七九

萬葉集から	四九〇
ワイマアル途上	四九二
オウヴエル行	五〇一
リギ山上の一夜	五二三
翌日	五五
ユンクフラウ行	五三七
山峽小記	五四七
續山峽小記	五五三
オウベルシニタイネル先生	五六五
ナポリ遊行記	六〇二
をどり	六一七
脱帽	六二二
淨玻璃の鏡	六二五
谿谷	六九
午睡録	六三〇

古泉千樫君	六三四
人麻呂其他	六四一
古泉千樫君	六四三
芥川氏	六四九
佛法僧鳥	六五一
佛法僧鳥の辨	六六二
遍路	六七一
芥川	六七七
山蠶	六七八
かてもの	六八三
「かてもの」補遺	六八九
漱石先生	七〇〇
日記抄	七〇二
宮坂勝君	七〇五
雑語	七〇九

蟲類の記	七九
長崎追憶	七九
蕨	七五
晩秋小筆	七五
ヴェスヴィオ山	七六〇
歸途	七六七
ボンベイ	七七三
日本媼	七七八
南京蟲日記	七八四
日本大地震	七九六
イーサル川	八〇八
ヒットレル事件	八一七
民顯市	八三三
悲歎の日	八四一
五十年記念日	八四六

カフェ・ミネルワ	八五二
麥酒壺	八五七
レツクス君	八六一
馬	八六七
ヴントの心理學	八七三
レーニン	八七七
戰時中	八八〇
寫眞畫報	八八六
國王の葬禮	八九〇
王家の寫眞	八九四
後記	八九七

一口ばなし

桑くはは蠶こ葉はの意ださうである。桑の歌としては萬葉卷七譬喻歌に『足乳根乃母之其業桑尙願者タラチネノヘハガソノナルクハスラモネガハベキヌニキルトイフモノゾ』といふのがある。桑葉は特別に面白くもないが桑實は今から想へば何となしい氣持を起させる。己の國では一般に『クハゴ』といふがあの色とあの味とおもふと、性慾の目ざめて來た頬の赤いそして眼のまるい娘が聯想される。娘は畑の雜草をとりに行つてゐる。手の動くのが止んだ。娘は側にあつた蟻の穴に指を入れながらゆうべ見た若い衆の事をおもつてゐたのである。そこに黒く熟んだ『クハゴ』がひとつ、ぼたりと落ちたさうである。

イチジクといへば無花果の事ばかりと思ふが寛永年間無花果がはじめて長崎に傳來した以前は、天仙果いぬびはを矢張りイチジクといつて居たさうである。

左千夫先生のこと

伊藤左千夫先生は反省だの修養だのといふことについてよくよく話されたが、先生自身の内から動いてくる力が、あの大きな體でも抑へきれないほどであつたやうである。そこで先生は短氣で、何事も我慢が出来なかつたやうに見え見えた。嬉しい時でも癪に觸る時でも、それが赤裸裸にあらはれるやうに見えた。言葉を換へていへば、先生のあらゆる行動は先生の命の純なるあらはれであつたと云ふことが出来る。

先生は嘗て正岡子規子を論じて、心の動くままに行動した人であつた。少しもエラク見えない人であつた、と云はれたが、この言葉はやがて先生自身のことを語つて居るのである。

而して、一首の歌が分かれば天下國家などは何でもないと云つて居られたが、僕らのことをも常々心配せられ、齋藤君もあの子供では病院やるのも面倒だらうとか、古泉君も今の儘のぐずぐずでは困るなどといふことを云はれたものである。

本年の四月、淺草の寺で石川啄木の追悼會のとき先生も出席され、そのとき初對面の前田夕暮

氏に、『あなたの「詩歌」の歌も段々アララギの歌に近づいて來ましたね』と云はれた。すると側にゐた土岐哀果氏が、『しかし前田君の方からいへばアララギの方が詩歌に似て來たといふことになるんだらう』と云はれた。先生のこの飾らぬ言葉は實は前田君に對する會釋であつたのである。萬事がかういふ風であつたから、周圍から微笑を以て迎へられるといふところもあつたのである。土岐君が初對面以來先生に好感を持つやうになつたのも、さういふ直感に本づいてゐるやうである。

先生の門人等は時たま先生から褒められて居る。明治三十七年八月發行の馬酔木で古泉千樫が褒められた。

『以上二十首中十二首を録す。古泉君の作を吾馬酔木に見るは始めてなりと思ふ。一見平淡少しも巧を求めず、而して精神自から新らしき所あり。根本に何等の趣向なく、徒らに文字上に技巧を弄して得たりとなせるもの多き間にありて、古泉君の作意頗る予が注意を引けり』云々。

先生は、平明にして堅實な古泉君の作の特徴を認めて其を稱揚し而して古泉君を勵ましたのである。次に明治三十九年三月二日附のはがきで僕に云はれたのは、

『……貴君の作歌の傾向は甚だ面白く候。貴君は一種の天才なる事を自覺し、今の儘にて眞

直に脇眼ふらずにやつて貰ひたく候。決して人の眞似などせぬ様に願ひたい。悪ければ削る。出来たらばどしどし送り給へ。梅の歌も面白い。渡邊幸造君のも面白い。これは四號へ出すべく候。……』

僕を一種の天才だとまで勵まされ、そして僕の歌の癖を面白がられて、いつも人の眞似をするな眞似をするなと云はれたものである。ところが僕の悪い習癖が増長して來たとき、君の歌は部分的だ、技巧的だと戒められたものである。

丁度その技巧的の話をして居た時のこと、鹿兒島の高等學校に居た中村憲吉君から始めて歌の投稿があつた。その時先生は甚だ喜ばれ、これはなかなかたちがよいといふことをしきりに云はれたのであつた。回顧すれば其は明治四十一年の事で、日本新聞に載つた竹の歌である。

『素朴なる寫生の趣味に一種云ひ難き味あるを覺ゆ。一見淡然として然も作者の用意底にこもれり。予は平生寫生歌の容易に成功し難きを云へるもの、今此作を得て前言の淺きを悔ゆ。敢て一言を附する所なり……』

かういふ批評が附いて居る。

近頃諸同人におくられた先生の書簡を見るに、僕等に對して、腑甲斐ない腑甲斐ないと思つて居られたことが分かる。恐らく先生は僕らの事を、まだ遠いまだ遠いとおもひながら死んで行か

れたことだらう。秋の一日代々木の原を見わたすと、遠く一ぼんの道が見えてゐる。赤い太陽が團々として轉がると、一ぼん道を照りつけた。僕らは彼の一ぼんの道を歩まねばならぬ。

先生の安らかなお體をば寢棺の中に納めまうしたとき、奥さまが先生のふだん用近眼鏡二つを棺の中に入れられた。この近眼鏡二つかけられて、而して先生は子規先生から近眼の人は迂であると批評せられたのであつた。(大正二年十月十二日記)